

「罪の赦しを深く味わう」(2022. 7. 17)

しかし、父親は僕たちに言った。「急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。」(ルカ 15:22)

放蕩に身を崩し、雇人の一人にでも・・・と立ち帰った弟息子。思いがけず、父親は走り寄り、ハグし、接吻し、さらには僕たちに上掲の指示をする。大変な歓待である。特に「手に指輪をはめてやり」ということは、変わらず愛する息子だ、ということである。これが「罪の赦し」です。

実は東神大に入るまでこの「罪の赦し」についてその積極的な側面を理解していませんでした。それまで私は、罪の赦しというのは、もはや責められるところのない者にされた、つまりマイナスをゼロにさせていただいた、借金ゼロと理解していたのです。

十字架の前に差し出された私の罪・過ちはもはや思い出されなさい！きれいさっぱり忘れていただいた。神のノートから私の罪・過ちの記録は抹消され、神の記憶にも二度とよみがえってこないという事です。素晴らしいことです。

ところが、罪の赦しとは、ゼロに留まらない。マイナスからゼロを通り越して、プラス無限大の地点、死に至るまで信仰の従順を貫かれたイエス様のような神の子とされた、ということです。わかりやすく言い換えれば、神様は私たちを、「あなたはオール5、オール〇、いやオール花丸だ」と評価されている！ということです。たとえ他人から、特に身近な人から「あなたは1、×だ」と言われても、あるいは自分が自分をそう評価しても、神様は「あなたはオール5、オール〇、いや花丸だ」と祝福してくださるのです。キリストにあって神の子なのです。なんと素晴らしいことでしょう。

このように、罪の赦しとは、私が一度も罪を犯した事がない者としてだけでなく、もっと積極的に信仰の従順を貫いている者として見做される、ということです。パウロはこの恵みを「キリストを着ている」と表現し、自分を小さなキリストと見做しています。

そこで確かにしたい。罪の赦しが素晴らしい理由は、十字架の御業が完全だからです。私たちは洗礼を受け、聖餐の度ごとにこの恵みを深く味わい、力にして歩むのです。

